文学的表象とポジションの移転

——佐藤春夫の『南方紀行』を中心に

呉　光　輝・杜　海　懐・呂　綺　鋒

Literature Representation and the Transfer of Position

—A Review of *Nanpokiko*（南方纪行）

WU Guanghui, DU Haihuai and LV Qifeng

Sato Haruo paid a visit to Xiamen and Zhangzhou in Fujian Province in the summer of 1920 and wrote the travel notes based on this visit in the name of *Nanpokiko*. This travel notes prompted Sato Haruo's first impression of Xiamen as a 'monkey' and a 'girl', mentioned the 'Jimei school' public welfare undertakings , the southern scenery as a heresy of nature and treated the Chinese people as the Other. All these came up with the image of the south in Sato Haruo's travel notes, which also revealed his inner potential thinking tendency.

Keywords: Sato Haruo　*Nanpokiko*　Representation　Transfer

一、はじめに

近代日本人の中国紀行として、佐藤春夫（1892-1964）の『南方紀行』がよく挙げられている。その紀行文について川本三郎は次のように述べている。

> 佐藤春夫は、1920年（大正９）の夏、台湾に渡った。それは思い屈する事情があって、郷里に帰ってきた時、台湾に住む旧友に誘われて、急に遊意がわいたからである。台北からタカオに赴き、７月上旬、その旧友の根城を見物したが、汽船にひと晩乗れば台湾海峡を渡れる。対岸の地方を見物してこようと、厦門に渡った。泉州は戦乱で行けなかったが、厦門、潭州（筆者：漳州のことを指す）のあたりを８月上旬にかけて二週間ばかりうろうろした[1)]。

１）川本三郎『大正幻影』、東京：岩波書店、2008年、214頁。

この文章から明らかなように、佐藤春夫が一回目の台湾・中国大陸の旅行を決心したのは、「鬱屈に耐へぬ事情」による「極度の神経衰弱」にあり、台湾のタカオ（高雄）に住む友人の東熙市から誘われたからである。この「事情」とは何か、佐藤は自ら「大へん好いているひとがいた。それから大へん好かない女房がいた。今だから言うが、そういうことで思ひ屈して私は台湾三界へ放浪しに出たのである」[2]と明かすが、言い換えれば、谷崎潤一郎（1886-1965）の夫人千代との苦渋に満ちた「恋愛」がもたらした自らの憂鬱を晴らそうと、佐藤は台湾へ放浪の旅に立ったのである。

大正９（1920）年７月６日に始まったこの旅は、基隆港に上陸した時から、同年10月15日に台湾を離れるまで、約三カ月余の長旅であった。途中、台湾先住民族の研究者森丑之助（1877-1926）から、旅行日程や先住民族についての教示を受け、また同じ森によって台湾総督民政長官の下村海南（1875-1957）に引き合わせられ、旅行で多くの便宜を受けた[3]。そのおかげで、佐藤は、北部の基隆から南部の恒春まで、台北、霧社、阿里山、日月潭、安平、打狗（高雄）などを見物した後、森の助言を受け、７月21日から２週間ほど、対岸の厦門や漳州を旅した。

この旅を晩年回顧した佐藤は、「放浪自適、実にわが青年時代のなごり」[4] と評し、格別の思い入れを抱いているが、実は今回の旅により佐藤は、多くの文学の成果を収めた。台湾旅行をもとにして、「旅びと」、「霧社」、「女誡扇綺譚」、「殖民地の旅」などの作品、いわば「台湾もの」と呼ばれる十数篇の小説、紀行文、随筆を発表している。それのみならず、大陸旅行中の見聞を題材とする作品として、旅行直後に書かれた紀行文――『南方紀行』が取り上げられる。

佐藤春夫の『南方紀行』の研究をめぐって、森﨑光子「佐藤春夫と台湾・福建省の旅――『南方紀行』『霧社』の旅――」[5] も周海林「『南方紀行』と『霧社』――佐藤春夫、中国への初旅が意味するもの――」[6] も、なぜ中国が悲惨な状態に陥ったかを一切考えることがなく、西欧と日本の暴挙に批判の筆を執らなかったというように、批判の立場からテキストの分析を行っている。それらに対して、河野龍也は「佐藤春夫『南方紀行』の中国近代」シリーズ[7] を発表し、さらに「佐藤春夫が描いた厦門――体験の現場と創作の風景をめぐって」を発表した。そこで、『南方紀行』の特色がまさに「日本人の盲点となりがちな場所を描いている点にこそある」と述べ、「厦門の印象」、あるいは厦門という他者への認識には、春

2）佐藤春夫『旅びと』、『定本 佐藤春夫全集』第５巻、京都：臨川書店、2001年、10頁。

3）森崎光子「佐藤春夫と台湾・福建省の旅――『南方紀行』『霧社』の旅」、芦谷信和・上田博・木村一信編.『作家のアジア体験――近代日本文学の陰画』、京都：世界思想社、1992年、72頁。

4）佐藤春夫『かの一夏の記』、『定本 佐藤春夫全集』第21巻、京都：臨川書店、2001年、228頁。

5）森崎光子「佐藤春夫と台湾・福建省の旅――『南方紀行』『霧社』の旅――」、芦谷信和・上田博・木村一信編『作家のアジア体験――近代日本文學の陰画』、京都：世界思想社、1992年、69-85頁。

6）周海林「『南方紀行』と『霧社』――佐藤春夫、中国への初旅が意味するもの――」、『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』、1995年、73-84頁。

7）河野龍也「佐藤春夫『南方紀行』の中国近代（一）――一作家が見た軍閥割拠の時代」、『実践国文学』第79巻、2011年、43-60頁。「佐藤春夫『南方紀行』の中国近代（二）――漳州訪問先のこと」、『実践国文学』第82巻、2012年、26-44頁。「佐藤春夫『南方紀行』の中国近代（三）――東熙市と鄭享綬――」、『実践国文学』第84巻、2013年、50-67頁。調査報告98「佐藤春夫、台湾で居候になる――インタビュー・東熙市一家の記憶から――」、『実践国文学』年報33、2014年、278-301頁。

夫らしい「文明批評」の特色が現れているとも指摘している。

本論では、このような研究成果を踏まえ、佐藤春夫の『南方紀行』を中心に、この紀行文で取り上げられている第一印象としての「猿」と少女、集美学校の“公益事業”、異端としての南方の「自然」、他者としての「陳」という人物などを分析し、佐藤春夫の「南方」の印象のみならず、氏の潜在的な意識や思考様式を考察したい。

二、佐藤春夫の『南方紀行』

1）『南方紀行』

『南方紀行』という紀行文集は、大正10（1921）年８月から大正11（1922）年２月にかけて、雑誌『野伊雑誌』、『新潮』、『改造』、に連載したものをまとめ、大正11年（1922）４月20日、新潮社より『南方紀行』と題して刊行されたものである。サブタイトルとして「厦門採訪冊」とある。『南方紀行』の「目次」を繙くと、「小引」、「漳厦地方略図」に続き、合わせて六つの作品が収録されている。

表１　佐藤春夫『南方紀行』初出一覧

作品名	発表紙誌	発表年月
①厦門の印象（初出題「探偵小説に出るやうな人物」）	『野伊雑誌』第１巻第７号	大正10．11．1
②章美雪女士之墓	『改造』大正10年９月増大号第３巻第10号	大正10．9．1
③集美学校（初出題「南方紀行（二）/集美学校」）	『新潮』第35巻第３号	大正10．9．1
④鷺江の月明（初出題「南方紀行（三）/月夜」）	『新潮』第35巻第５号	大正10．11．1
⑤漳州（初出題「南方紀行（一）/漳州）	『新潮』第35巻第２号	大正10．8．1
⑥朱雨亭の事、その他（初出題「空しく歎く」の一部	『改造』第４巻第２号	大正11．2．1

この表１から明らかなように、『南方紀行』の補遺として、「朱雨亭の事、その他」という部分は、後に『剪られた花』に収録されている。それを除き、初出のなかで、「南方紀行（一）～（三）」（表１の⑤→③→④）が『新潮』雑誌に連載される一方、③（「集美学校」）と同時に②（「章美雪女士之墓」）が、それから、④（「鷺江の月明」）と同時に、①（「厦門の印象」）が執筆されているように考えられる。ところで、④の付記に示されているように、「この章は前々号、『集美学校』（表１③）の次の章で、八月号の（一）（表１⑤）は、この章の後に来るべきが、自然の順序である。筆者は勝手な都合で、かういう順を追はない書き方をした」ものとして、旅程に即さない書き方をしたということを吐露している[8)]。

紀行文として、日程に従い、旅行中の体験や感想などを書き記すというのは、ごく一般的な書き方ではあるが、佐藤は、それに即さず、飛躍した記録方法を採ったのである。そのうえ、『南方紀行』を「思い出すままを一つ気まぐれに書きなぐって」、「私自身の気に入ったこと[9)]、どもやらそれを喚び起こすに当然な順序となるものなどをごたごたと書き流して」いると佐藤自身が述べている。大正９（1920）年

8）『南方紀行』解題、『定本　佐藤春夫全集』第27巻、京都：臨川書店、2001年、430-431頁。

9）佐藤春夫『剪られた花』、『定本　佐藤春夫全集』第４巻、京都：臨川書店、2001年、106頁。

の台湾、厦門の旅は、これらの文章の刊行より、たった一年前のことである。数え年30歳を迎えた佐藤も、「自分の記憶のさまで古くもないもの」と自慢している。言い換えれば、この旅のことをはっきり覚えていて、何を捨てるか、何を取るべきかを一切問わず、あるいは取捨選択の作業をせずにそのまま書き流しているのである。

大久保典夫は、かつて次のように指摘した。文学研究の立場からこの作品を論じると、「『南方紀行』は「『紀行』というより、いかにも佐藤春夫らしい詩趣と観察眼の働いたすぐれた作品である」[10] としている。本論では、この詩趣と観察眼という二つの立場から、「佐藤春夫らしい」もの、とりわけ厦門・漳州の考察を中心に、佐藤春夫の独特な視野、関心事、注目した物、さらに、この旅からの衝撃（インパクト）を明らかにしたい。

2）厦門の第一印象：猿と少女

> そんな家の一軒を、私がふと見上げた時に私が美しいものを見つけた――あざやかな藤色の上着をつけた支那少女なので、それが、二階の部屋からバルコンへ現れたところだ。彼女は何か気がるな心持ちと見えて晴れやかな笑顔をして海の方へ瞳を放ったが、つとバルコンのグロテスクな唐草模様の鉄の欄干へ細い上半身を危いほど折り曲げてうつむくと、下の方を覗き込んで、地面にでも遊んでいるらしい猿を片手をふってからかっていた。――猿だ、と私は思ったのだ。自然にそんな気がしたのだ、どうしてだか知らない。そうして実際に地面にいてこの少女にからかわれてるものは犬だか猫だか、それとも人間の小児だか私は知らない――私が私の直観的空想をたしかめようと思った時には、私たちの舢板はもうあまりその家の石垣に接近しすぎていたために、その石垣の高さが邪魔をして見られなかったのである。猿だった、とそう私は決めている。厦門の第一印象としてはあの家のあのバルコンにいた藤色の少女がからかっていたものはどうしても猿でなくちゃならない[11]。

佐藤春夫は『南方紀行』のなかで厦門の第一印象を、以上のように書いている。大正９年（1920）年、佐藤春夫は案内人の東家の書生の「鄭」と一緒に、台湾の打狗（高雄）から出発した。汽船が目的地厦門に近づいているうちに、厦門島の姿は、だんだんはっきりしてきた。ところが、佐藤春夫にとって、厦門の「第一印象」というのは、汽船の甲板から見た「一連りの赤い煉瓦造の洋館が赤黒く重ってかたまっている」、「思ったより貧弱な町」――といった厦門の市街の様子ではなく、本船から乗り換えた舢板で目に映った「殆どの家の壁にも種種雑多な煙草の広告が、雨風に曝されて彩色の褪せた絵や文字などで一面に塗り埋められてある。…そんな風な煙草の広告に代用されている沿岸の家並」[12] でもなく、むしろ一人の中国少女、それから猿のことだった。

たしかに、赤黒く重なる赤い煉瓦造の洋館の厦門市街、彩色の褪せた煙草の広告の家並みによって構成された暗い世界において、晴れやかな笑顔を持つ藤色の少女はまるでそこに差し込んだ「光り」のよ

10）大久保典夫「佐藤春夫△南方紀行△」、『近代日本文学における中国像』、東京：有斐閣．1975年、87頁。

11）佐藤春夫『南方纪行』、東京：新潮社、1922年、12頁。

12）佐藤春夫『南方纪行』、東京：新潮社、1922年、9-12頁。

うに見える。この「暗・明」という二元対立の世界を構築することに、佐藤春夫のいかにも耽美派らしい偏奇趣味、異国情趣が現れていると言えるかもしれないが、すべてが「第一印象」を強調する仕掛けとなってくる。佐藤春夫が注目したのは、「藤色の上着をつけた支那少女」、「晴れやかな笑顔」、「グロテスクな唐草模様の鉄の欄干」、空想上の「猿」をからかう行為だった。この一連のエレメントによって、厦門のごく普通な日常生活の一シーンが思い浮かべられる。ただし、なぜ「厦門の第一印象」で、佐藤春夫は、この「猿」と「少女」に拘ったのだろうか。

もともと「第一印象」とは、物事や人に接した時、最初に受けた感じである。赤い煉瓦造の洋館や煙草の広告は佐藤にとって「第一印象」のように見えるが、決して彼自身が認めた、或いは「想像」したものではない。むしろ、近代化が進んだ日本から来た佐藤にとっては、自分の目に映された厦門の「もの」は、すべて日常生活に溢れている近代化の産物であるため、無意識のうちに無視されるかもしれない。それよりも、少女と「猿」という生き生きとしたシーン、さらに伝統的な中国に特有の風物に対して、佐藤は人生、あるいは異国への感動を覚えるようになった。言い換えれば、佐藤春夫にとって「第一印象」は、かつて日本で経験したものの模写ではなく、どこまでも新しい発見として、しかも自らの「中国想像」に合わせようとするものにしかない。

なぜ「猿」のことなのか。先の文章から明らかなように、実物が目に入らないところから、佐藤は「猿でなくちやならない」と断言した。「猿」という形象の象徴的意義をめぐっては、研究者の董熠晶がかつて指摘したように、18世紀のヨーロッパにおいて「猿」の姿は、中国独自の雰囲気あるいはエキゾチシズムを掻き立てるために、中国題材の芸術品や文学作品のなかで頻繁に現れている。鴉片戦争以降、「猿」は、直接に中国人のことを指し、中国人の野蛮かつ未開のイメージを具現化するものとなった[13)]。このような「猿」の定型化は、佐藤春夫乃至は1920年代の中国印象の叙述に、まさに一つのヒントを提供しただろう。ただ、『南方紀行』の文脈から考えると、少女が実は「東園」という茶園――茶園は妓楼と違って、瓜子を食べ、茶を飲み、歌妓たちの歌を聞いたり歓談したりする憩いの場所であり、友人たちと妓楼を次から次へと登った佐藤春夫は、寛ぎとして「東園」に入ったと記述している（「鷺江の月明」）。――のウェイトレスであると分かる。したがって、少女が「猿」のことをからかっているということは、実は、茶園という場所の設定、それから少女のウェイトレスという身分の設定から、「猿」、あるいは「男性」に玩ばれ、欲望のむき出しの性的な暗示が隠されているように思われる。

ところが、なぜ「猿」のことなのかという問いは、猶更解決されたというわけではない。たしかに、「第一印象」はもともと、物事や人に接した時、最初に受けた感じである。が、佐藤春夫の文章をよく読むと、それは市街の様子や家並みを一一否定しつつ、猿だ、猿だったという「反省」を通じて「直観的空想」を確かめたものである。このようなプロセスを経験した第一印象とは、どこまでも「第一」のものではなかろう。言い換えれば、この「第一印象」を理解する場合、むしろ新しい立場、いわば哲学の立場、あるいは、ジャック＝マリー＝エミール・ラカン（Jacques-Marie-ÉmileLacan、1901-1981）の「鏡像」理論を借りて解釈すると、他者を鏡にすることにより、他者の中に自己像を見出す、つまり「猿」

13）董熠晶『猴子与近代欧洲文化视野中的中国人形象――从18世纪“中国热”到20世纪初』、北京大学硕士研究生学位论文、2007年。

の形象は、どこまでも佐藤春夫自身の「形象」を造形したものように思われる。もし「猿」の形象が、直接「野蛮」かつ「未開」のイメージを具現化するものならば、それはやはり、佐藤春夫の自己認識――「野人」の理解に繋がっていくのではないかと思われる。

三、厦門の印象

1）公益事業と人格主義の間

『南方紀行』における様々な情報をまとめてみると、佐藤春夫が集美学校を見物する前に、その学校に関する事情を次のように把握したことが分かる。大正２（1913）年、華僑の息子――陳嘉庚・陳敬賢兄弟は、私財百五十万円を投じて、集美に華僑の子弟向けの教育校として、集美学校を建設した。八年後の1921年、陳嘉庚・陳敬賢兄弟は、名寺南普陀寺院付近に、厦門大学の新校舎の建築を予定しており、学生の募集も始めたのである[14)]。大正９（1920）年、厦門へ訪れた佐藤春夫は、このような教育事業をめぐって、次のように述べている。

> 何にしても、財を吝んで公共的な事業には決してそれを費そうとはしない支那人としては、ただ地方的にというだけではなく、支那全土でも珍しい奇特な事として、旅行者などが時々、集美を見物にいくそうである。公共事業という種類のものにはあまり興味を見出し得ない私ではあるが、見物して見てもいい[15)]。

このように、集美に興味を抱き、佐藤春夫は鄭と一緒に厦門から舢板に乗り込んで、集美に向かった。ただ、正午前に集美に着いた時から、午後三時半に学校を出るまで、佐藤春夫の見学は、実に時間は短かった。あいにく夏休み中で、結局、集美学校の教育事情を体験することが出来なかったのである。「集美学校という題をつけながら、私は学校そのものに就いてはあまり書かないでしまったやうで気がひける」[16)] と言った春夫は、おそらく集美学校のことをよく知らず、何を書こうと結構悩んでいたのではなかろうか。とはいえ、春夫は休暇中も帰省しない学生に親切に「丁寧な英語」[17)] で招待されて、彼らとの交際から新教育を受けた新世代の姿を注視し、学校から「福建私立集美学校九年秋季招生簡章」――民国九年の秋の生徒募集書――をも貰い、学校の課程設置や学費免除などの政策を一応了解したのである。

この集美学校の見学のなかで、佐藤春夫による陳嘉庚・陳敬賢兄弟への批評を取り上げたい。ひとりで校舎を見て歩くうちに、佐藤春夫は、玄関の突き当たりのところに掲げてある校主の陳兄弟の大きな写真を見て、途端に「些か不愉快な気がせずには居なかった」[18)] とある。さらに、「陳兄弟のこの学校もやはり、上海から俳優を呼び広東から仕掛花火を寄せて人々の耳目を聳え立たせる還暦祝その目的に於

14）佐藤春夫『南方紀行』、東京：新潮社、1922年、55頁、60頁。
15）佐藤春夫『南方紀行』、東京：新潮社、1922年、60-61頁。
16）佐藤春夫『南方紀行』、東京：新潮社、1922年、85頁。
17）佐藤春夫『南方紀行』、東京：新潮社、1922年、66頁。
18）佐藤春夫『南方紀行』、東京：新潮社、1922年、77頁。

いて五十歩百歩の仕事に思へたからである。いや、その方が寧ろ邪気があるとさへ感じた」[19] と。春夫は、ある晩、華僑の別荘が林立するコロンス島で、贅沢な還暦祝で忙しいある別荘の庭園を通り抜けた。集美学校で陳兄弟の麗々しい写真を見て、佐藤春夫は直ちに、学校の設立精神がそれと同じものであると断言し、しかも学校のほうがもっと性質が悪くて、その内実はあくまでも公益を名目とする一種の自己顕示欲に過ぎないと思い込んだ。

このような佐藤春夫の極端な反応をめぐって、研究者の河野龍也は、「春夫が『南方紀行』で現代中国の諸事象を評価する際に共通して見られるのは、ある事業が結果としていかに公益の理念に適っているかということよりも、それを行う事業主に善意があるか否かを問う人格主義的な立場である」[20] と指摘した。言い換えれば、佐藤春夫は、人格主義的立場から、陳兄弟の公益事業に批判の態度を示しているわけである。ただし、後になって佐藤は思い返した。「五十歩と百歩、いや五十歩と六十歩と、その些些たる違ひを味わっていなければ、微々たるそうしていずれは大差のない人間のすることの価値を上下する尺度は失はれるであろう」[21] と、批判と反省をし、「集美学校の玄関に陳兄弟の麗々しい写真を見出して不快であったのも事実であるとともに、陳兄弟の事業にはやはりそれ相応の敬意を表すことにする」[22] と述べている。

たしかに、内戦、貧困、私娼、鴉片、賭博、このような暗黒の近代中国のなかで、局面の打開のため着手した陳兄弟の教育事業は、たとえ私心があるとしても、尊重すべきである、と佐藤春夫は考えている。が、このような批判、反省、転換、敬意を表すという佐藤春夫の「態度」或いは「立場」の移り変わりから、過去の「人格主義」者から「公益」の理念に何らかの関心の態度を示し、文学の立場からいわゆる「国家」のために何かをしようとするものへ——佐藤春夫は愛国詩人として「愛国詩」をよく創作した（河野竜也）——という佐藤春夫の精神的転換が、密かになされているように思われる。

2）正統・異端としての「自然」

> その日の鷺江の夕暮は美しく楽しいものであった。私はその夕方以来支那沿海地方では鷺江の風光が第一だという定評や、西湖もこれには及ばないと言った人を、信じようと思う。——西湖も他のどの地方をも知らない私ではあるが。私自身に就て言えば、私はあの日の夕方ほど私の趣味にしっくり合った自然をその前にもその後にも未だ一度も見たことはない[23]。

佐藤春夫が集美学校の見学を終え、帰りの船で鷺江の風光を満喫して書き記した「鷺江の月明」の一節である。このような厦門の風光に対して、佐藤春夫は、杭州の西湖に触れて、「私自身に就て言えば、私はあの日の夕方ほど私の趣味にしっくり合った自然」[24] だったと考えている。

19）佐藤春夫『南方紀行』、東京：新潮社、1922年、77頁。

20）河野龍也「佐藤春夫『南方紀行』の中国近代（一）——一作家が見た軍閥割拠の時代」、『実践国文学』、第79巻、2011年、55頁。

21）佐藤春夫『南方紀行』、東京：新潮社、1922年、77-78頁。

22）佐藤春夫『南方紀行』、東京：新潮社、1922年、78頁。

23）佐藤春夫『南方紀行』、東京：新潮社、1922年、91頁。

24）佐藤春夫『南方紀行』、東京：新潮社、1922年、91頁。

このような西湖と鷺江の比較、「私の趣味にしっくり合った自然」、さらに「私自身」とは何か、ということは、佐藤春夫の人生の中で続いている。昭和２（1927）年、佐藤春夫は二度目の訪中を果たし、文学者の郁達夫と西湖湖畔を訪れ、「（中国）軍人の横行或は庶民の軍人優待」という中国の社会情勢を目撃した一方、「（西湖の）湖上に舟を浮かべて夏の夜の更けるのも忘れた」[25] ことを経験した。それに続き、昭和16（1941）年、佐藤春夫は中国での経験を思い出して、「鷺江と西湖」という文章を書いている。

> 鷺江の美はその海も山も少々荒々しいところがあっても結構も大きい。
> ……
> 鷺江は幾分粗野でその代わりに生々しい美しさがある。それはいかにも大陸の海岸にふさはしい眺めであった。鄭成功の悲壮な歴史さへあの風景の荒さと結構の大きさのなかではい聊か位負けする程のものを感じさせた。鷺江に較べるまでもなく、西湖の美は築山のやうな盆景めいた温雅にまとまりのいい可愛いい風景である。そうしてこの風景のなかで蘇堤や白堤などのあらゆる人工がいかにも風景と親密に調和している。この風景に人工の調和するのはただ建築営造物だけではなく詩文や伝説などもなくてかなわぬ風景である。歴史も南宋の哀史であるがためにどうやら似合わしいを思わせる。すべてが物柔らかに調和して大陸とも思われない一廓をなしている。……
> 思うに、西湖はよく文化を抱括するばかりか文化を肥料として成長した風景美であり、鷺江はこれを全く受けつけない野人らしい風景美である。一つはよく詩文を語り歌曲を論る異性の友と如く、一つは壮快に卒直に生活と真情とを披瀝する漁夫の如くであろう[26]。

佐藤春夫の視野のなかで、鷺江は、「反逆」的な性格を持ち、中国大陸でも日本でも見飽きるほどの人工的な美と異なり、一種の野性の美を生み出したものと見られた。

表２　鷺江と西湖との比較

鷺　　江	西　　湖
海も山も荒々しい 結構（スケール）の大きい	温雅にまとまりのいい 可愛いい
粗野でありながら「生々しい美しさ」	風景と親密に調和している「人工的な美」
海岸	大陸
鄭成功の悲壮な歴史	南宋の哀史
（文化）を受けつけない野人らしい風景美	文化を肥料として成長した風景美
異性の友	漁夫
大陸の僻地 異端	大陸文化の中心部 古来文化の正統

この記述のなかで、「西湖より鷺江の方がいいとは決して言わない。ただ自分の気風には合うらしいと

25）佐藤春夫「西湖の遊を憶う」、『支那雑記』、東京：大道書房、1941年、206-215頁。
26）佐藤春夫「鷺江と西湖」、『定本　佐藤春夫全集』第22巻、京都：臨川書店、2001年、157-158頁。

思う、結局自分が野人だからであらう」[27] と、佐藤は続けて述べている。このような記述から明らかなように、人の興味に迎合するために改造された西湖よりも、野趣に溢れる鷺江の自然の美のほうが、佐藤に一種の喜びを与えるのである。そこから、佐藤は一つの「身分」――「野人」とは、純粋で自然な人間のようなものである――の証明を獲得した。

3）他者としての「陳」

漢文学からの影響や憂悶の旅愁を訴え、佐藤は一層孤客の自己意識を強くしたが、一旦中国の旅を経験し、普通の中国民衆に向き合うと、専ら文化の相違から生じた好奇心、困惑、不安、さらに軽蔑と言える感情が、自然に沸いてくるであろう。このような感情の転換は、ある意味において自らの「Position」の移転と直接つながって、新しい自己を樹立させる前提ともなってくる。

「厦門の印象」において佐藤は、台湾青年紳士「陳」という人物を「他者」として提起している。最初に陳の「少々滑稽でないことのない物々しいいでたち」、「一種慇懃に気取った様子」[28] に目を惹かれた佐藤は、陳のことを「何か探偵小説に出て来さうに不安なうさんな感じの人物である」[29] と評していたが、後に、案内者鄭の顔馴染みと知り、同行することにした。実は、「厦門の印象」の初出題は、「探偵小説に出るやうな人物」[30] であることから、陳が全章を貫く主人公として、大きな役割を果たしているとわかる。

佐藤春夫の「観察眼」のなかで、為替の銀行で銀貨を一枚一枚、受付の板の上に落としてみて、その音で正贋を確かめるという陳の行為、宿泊する南華大旅社で内側から錠をかけた陳の部屋、すなわち佐藤が最初に「性的行為」と推測したが、結末で鄭の言葉により、陳が部屋で鴉片を吸っていたと分かる。その芸者屋に通い、時に私娼の家に泊まる放縦な生活……このように陳のことごとくが日本人の「私」と対立し、異質性や神秘性を持っている。ただし、それこそ佐藤の興味を引き起こしたものだった。台湾に帰ってからも、ときとき陳の滑稽でものものしい服装と不気味に慇懃な態度と「度はづれに放縦らしい行動」[31] を思い出すに至ったのだ。

すでに述べたように、『南方紀行』の「書誌」から、「朱雨亭の事、その他」を除く前五編の中で、中国旅行の最初であった「厦門の印象」が最後まで完成したということがわかる。春夫自身が「筆者は勝手な都合で、かういう順を追わない書き方をした」[32] と弁解していたが、実際記憶の不確定性から、「陳」という人物のイメージは真に実在の人物なのか、ということすら検討する余地がある。証拠の一つに、昭和12（1937）年、佐藤春夫は雑誌『改造』に「厦門のはなし」というエッセイを発表した[33]。その中で、厦門の排日の気分や旅社のボーイの悪戯などを記録していたが、彼にとって印象深いはずの「陳」のことには全く触れなかったのである。そこから見れば、「陳」のことがまさに空想上の人物、或いはた

27）佐藤春夫「鷺江と西湖」、『定本　佐藤春夫全集』第22巻、京都：臨川書店、2001年、157-158頁。
28）佐藤春夫『南方纪行』、東京：新潮社、1922年、6頁。
29）佐藤春夫『南方纪行』、東京：新潮社、1922年、6頁。
30）佐藤春夫『探偵小説に出るやうな人物』、東京：『野伊雑誌』第1巻第7号、1921年。
31）佐藤春夫『南方纪行』、東京：新潮社、1922年、39頁。
32）佐藤春夫『剪られた花』、『定本　佐藤春夫全集』第4巻、京都：臨川書店、2001年、第106頁
33）佐藤春夫「厦門のはなし」、『定本　佐藤春夫全集』第21巻、京都：臨川書店、2001年、407-413頁。

とえ現実に出会った人物であったとしても、自分の想像によって造り上げられたエキゾチックな人物かもしれない。

台湾青年紳士「陳」を一人のモデルにし、佐藤春夫は異国情緒に富んだ中国人の形象を造ろうとしている。佐藤の「観察眼」に映された普通の中国人が、いつも「支那人特有の大声でものを言っている」、しかも黙っている時にも、その表情は「気心が知れない」と佐藤は感じている。さらに、「実に呑気な支那人のことだから、彼等の安心も一向どうも心頼みに出来そうもない」と思うように至った。

中国人は吝嗇的であり、「財を吝んで公共的な事業には決してそれを費さうとはしない。」中国人は冷淡的であり、人が水に落ちたを見ても、「まるでよその猫がドッブに落ちでもしたかのやうに手を束ねて傍観している」(「厦門のはなし」の中で、「心理の冷淡さは今だに自分は理解できない」[34] と回想している)とした。宴席での中国の礼儀は、「一人が飲めば他の者も一口でも付き合う」ことだが、それに春夫はあまりにも慣れず、そして南華大旅社で一人の異風な紳士が部屋のバルコンの上へ平気に小便をやったのを見て、佐藤は多少驚いた。

それのみならず、佐藤にとって、一番感情的にインパクトを受けたのは、中国人の反日である。佐藤の観察眼のなかで、中国人は日本人のことが大嫌いで、従って、佐藤春夫は南華大旅社のボーイに悪戯され、市中に酔っ払った中国人に「こいつは日本人奴!」と怒鳴られ、体当たりを食わされた。行く先々の厦門の市街に排斥日貨のスローガンが多く掲げられた。

このような断片的な記述や評価によって、中国人の傲慢、信頼できぬイメージが構築された。さらにこのような中国人像を通じて、隠されている中国人に対する佐藤春夫の対立や排斥の態度が垣間考えられる。言うまでもなく、このような「陳」をはじめとする中国人は、必ずしも実存のものではない、むしろ「他者」として、あるいは「仕掛け」としての存在に過ぎない。

4)「支那趣味」から「南方憧憬」へ

すでに述べたように、『南方紀行』という紀行文は、苦渋に満ちた愛情問題に悩まされ、その憂鬱を晴らすため、佐藤春夫が出た放浪の旅の産物である。しかし他方、もとより中国文化に対する「異国趣味」的な関心、旅先に常に一人で孤立するという不安の気持ちなどきわめて複雑な感情が織り混ざったものである。中国文化に対する「異国趣味」的な関心、いわば「支那趣味」をめぐって、佐藤春夫は、『支那雑記』というエッセー集の序――「からもの因縁」のなかで、「自分の支那趣味は恐らくは近い祖先の意志であり、父の教育の結果であった」と語り、父のことを次のように述べている。

> 自分の少年のごろから常ね『眠れる獅子』たる支那を説き、アヘン戦争以後の歴史を鑑みて、近い将来に必ずこの国土を中心にして世界が運行することを豫言し、それ故にわが国民が一国もこの隣国を忘るべからざる事を常に説いて聞かせた。また支那の文芸美術の美と長を力説して当時の欧米文物の偏重の不合理を言い、支那文学の研究の疎かにすべからざるものと幾度か懇々教えられた。この教育とまた家大人の身邊に置かれていた文房の雑具や茶器などをからものと称して愛玩して居

34) 佐藤春夫「厦門のはなし」、『定本　佐藤春夫全集』第21巻、京都:臨川書店、2001年、412頁。

られる姿がいつの間にか自ら支那趣味を自分に鼓吹していたものらしい[35]。

ただし、「文芸美術」であれ「文房の雑具や茶器」であれ、あくまでも器物の表層に止まる「尚古の気風」に過ぎない。従って「自分の支那の認識もそれ相応に旧式なものに相違ない」のである。とはいえ、漢文学の古典から築かれた中国想像は、佐藤の後の「支那趣味」の根幹をなしている。

『南方紀行』のなかで、佐藤春夫の描いた中国の風情や景色から、伝統中国に対する憧憬や愛着がはっきりとうかがえる。彼にとって、漢文の古典によって築かれた古代中国の美しい幻像は、その生涯にわたって忘れられない記憶であり、しかもこのような純粋かつ頑固な幻像も、中国旅行に古典ロマンと異国情緒を探しつづける最大の原動力である。佐藤春夫がかつて、「自分の全著作の半分か三分の一位は支那に縁故のあることが書いてあるらしいのである。」という文で示し　たように、支那趣味は佐藤の創作の大きな原動力である。「剪られた花」の中で、佐藤春夫は「私は『南方紀行』を自暴自棄ともいう調子で書きなぐった。思い返すと過ぎ去ったことは皆美しくたのしいように見えたし、書かれることは私が愛してる異境でもあった」[36] と書き出したが、中国のことを「異境」と理解し、文学創作をがさも文学的ユートピアのように思っているに違いない。

このような「支那趣味」は、近代日本の急速な西洋化に対抗するささやかなアンチテーゼとして始まったが、このような「支那趣味」の背後に、「東洋回帰」という欲求が隠されている。佐藤春夫によって指摘されるように、「文壇には支那の伝統が表向には絶滅したやうに見えたし、国民一般の注意は欧米の方で眩惑され」ている。従って「日本文化の流れのなかに溶け入ってかすかになりながらも注視すればそれと気のつく日本的支那文化の伝説をせめて一縷でもつないで置くことは無用のわざではない。」[37] という念願から、彼はのちに、「支那文学」の翻訳を着手しはじめたのである。

『南方紀行』における伝統の中国への叙述を振り返ってみると、春夫の「南方憧憬」がそこに潜んでいるとわかる。十九世紀末から二十世紀初頭にかけてヨーロッパの詩人や文学者はかつて「南方憧憬」にとらわれ、ヨーロッパ文明を死滅していくものと感受し、それからの脱出口を求めるように、まだヨーロッパ文明に汚染されていないと信じられた「南方」を憧憬した[38]。文明を否定して、よその物に自分の精神を託そうとするヨーロッパの詩人や文学者と同じく、佐藤は「支那趣味」を主張し、何か自分の精神を託そうとする。たしかに、佐藤は精神的な不安定に陥ったため、南方への旅を決意し、そして台湾や厦門のような南方の風景に感動し、この精神的不安定の状態を癒した。

たしかに、『南方紀行』における「伝統」ではなく、「南方」としての中国は、晴やかな藤色の少女は気がるな心持ちで猿をからかい、漁夫が野趣に溢れる鷺江に舟を浮かべ、才子佳人が茶園で伝統民楽「開天冠」を鑑賞するという桃源郷のような別世界のように見えるが、必ずしも中国の一般的なイメージではなく、どこまでも「南方」なりの特質をもっているものである。つまり北方の頽廃と希望の伝承と異

35）佐藤春夫「からもの因縁」、『支那雑記』、東京：大道書房、1941年、２頁。
36）佐藤春夫「剪られた花」、『定本　佐藤春夫全集』第４巻、京都：臨川書店、2001年、106頁。
37）佐藤春夫「からもの因縁」、『支那雑記』、東京：大道書房、1941年、６頁。
38）川本三郎『大正幻影』、東京：岩波書店、2008年、215頁。

なり、南方は古典の魅力を持ちながらも、近代化に侵食されつつある。あるいは中国的な性格がありながらも、南洋風情が漂っているエキゾチックな地域である。そこから我々は近代中国の一断面を垣間見ることができる。

川本三郎の研究によれば、大正時代における文学者たちの「南方憧憬」は、一種「南洋ブーム」と呼んでもよいような南洋への関心の高まりと言えるという[39]。佐藤春夫は、それに気付かないはずはない。「厦門の印象」の中で、藤色の少女や、空想上の「猿」、「探偵小説に出るやうな人物」である台湾青年紳士の陳といった異質の人物が次々と登場しており、また「鷺江の月明」にも大陸の文人墨客が愛好する「人工的な」西湖と異なる、自然の荒々しさに満ちた鷺江のやや異質的な世界が描かれている。そして、南洋風情が漂っているコロンス島、厦門にある「妓楼」の官能的な享楽の世界、伝統民楽「開天冠」の「野蛮」な性格、つまり南方の風物に親近感を持つようになった。言うまでもなく、それらはあくまでも、幻想としての「南方」に違いないが、佐藤春夫の想像力に大きく働きかけているのは、事実である[40]。

5）東洋意識・オリエンタリズム・二元論的構造の問題

大正9（1920）年初の外国体験として、佐藤春夫は、台湾（植民地）と大陸（半植民地）という両方に足を伸ばした。福建旅行中、佐藤春夫は中国そのものを実感し、自然風光や伝統文化を満喫した一方、近代教育や地方の都市建設をも興味深く見学した。とりわけ現地の人々との接触は、佐藤春夫にとって望外の「喜び」――真の「中国」に接触するチャンスとなった。ただ、言葉の壁、「異国趣味」の破滅、排日のスローガンに刺激されたことで、中国と日本、それから中国と佐藤春夫の間に、やがて大きなギャップが生み出された。たとえ中国社会に入り込もうとしても、「日本人」というアウトサイダーの身分を常々に注意された。結局、中国のことを「他者」と見なすにしかできなかったのである。

この旅の開花として、佐藤春夫の「大陸と日本人」という文章も挙げたい。そのなかで、佐藤春夫は、中国のことを「世界の魔国」と呼び、また「支那の文化は自国で全く枯死して我が国に開花せんとしている。我々が大陸に進出してそこに文化を樹立する権利も義務もある所以ではなかろうか」と主張している[41]。言い換えれば、日本の侵略行為の正当性の弁護であり、中日文化の同質性を春夫自身は否定していないが、両国文化の「優劣」を付けることによって、「東洋意識」を背景とする差別的な中国認識の構築に努めたのである。

ただ、このような「大陸と日本人」の立場だけではない。例えば、オリエンタリズム論から出発し、研究者の西原大輔はかつて、「日本は中国を劣った国、進歩の可能性のない停滞した国をみなす一方で、

39）川本三郎『大正幻影』、東京：岩波書店、2008年、218頁。

40）近代日本における「南方」という概念の指す範囲は、「南進論」と呼ばれる国権拡張主義につれて広がって行った。もともと日本人は南方については琉球諸島、沖縄までの視線がせいぜいであったが、1895年台湾を、1914年南洋諸島を植民地として領有して以来、日本は「南方」のフロンティアをそこまで伸ばし、「南方」に進出することによって大東亜共栄圏を図ろうとした。昭和16（1941）年に出版された『南方読本』（三省堂、1941）には、「南方とは、この圏内（注：大東亜共栄圏）に於いて台湾から南の地方、主として南洋と指し…即ち大陸部の仏印、タイ国、ビルマ、英領マレーと島嶼部の蘭印、フィリピンを指しているのである」と明記している。

41）佐藤春夫「大陸と日本人」、『定本　佐藤春夫全集』第22巻、京都：臨川書店、2001年、187頁。

伝統を保存している美しい国として、憧れの対象ともした。西洋化の波に遅れた中国には、かえってエキゾチックな風景や風俗が残されたということである。」[42] と指摘している。日本と中国の比較の中で、「西洋化の波」という暗黙の基準が潜んでおり、進歩と停滞、憧憬と憎悪、劣った国と美しい国といった比較の中で、日本・日本人の優越意識、さらに日本によるアジアの植民地化という「歴史」が潜んでいる。

四、おわりに

佐藤春夫の東洋意識、オリエンタリズム論から、我々はむしろ、二元論的構造の問題に注意を払うべきである。『南方紀行』における佐藤春夫の中国認識は、「台湾―大陸」、「古典―近代」、「幻想―現実」、「自分―他者」という枠組みの中を徘徊している。それのみならず、佐藤春夫は終始、自身――「日本人」と「中国人」との異質性を強調している。自分が日本人、つまり生き生きと発展する文明国の国民であるから、自分と対立する中国人は明らかに腐敗、堕落の代名詞にすぎない。現実の中国はむしろ「支那趣味」の主張者たちにとって一つの落とし穴である。そこで、彼らは中国への想像、あるいは中国像の構築を通じて、自分乃至は日本の「Position」を立て直すことに努力していくしかないのである。

佐藤春夫が『南方紀行』において追い求める「中国」は、どこまでも漢文古典を内実とし、西洋文明に抵抗しつつ、古い歴史や深い文化を次第に失ったユートピアの世界である。そこで、大正時代の知識人の二つの文明意識がうかがえる。一つは、近代日本という自国の文化に対する微かな嫌悪感、つまり近代西洋の工業文明に無抵抗で、西洋化されつつある日本文化への批判が考えられる。今ひとつは、日本よりもはるかに長い歴史をもつ「古き良き」中国、このような中国に対する期待の感じがある。ただし、日本のように文明国にはならず、美しい自然を守り続ける、「桃源郷」のような中国は、現実には存在せず、ただ彼らの「想像」にすぎない。その結果、佐藤春夫をはじめとする日本人の知識人は、中国人の反日態度に刺激され、自らのことを先進国の国民、「経験者」とみなす傲慢な眼差しで、中国の近代化を傍観し、中国人の悲惨な運命を無視することに至ったのである。

佐藤春夫の中国考察の研究というと、多くの研究者は、伝統的中国への憧憬と近代中国への嫌悪という構造の中で、佐藤春夫の「支那趣味」を捉えているが、中国に対する佐藤春夫の「心情」から考えて見れば、決して単純に「憧憬」か「批判」かといった二者択一ではなく、むしろ憧憬と批判、期待と失望、受容と拒絶など、様々な感情が入り混ざっていると言えるであろう。そこで、中国の事情を単純に相対化して、二元論的構造の中でそれを捉える方法自体には、大きな問題があるようにも思われる。ただ、佐藤春夫、あるいはあの時代のみならず、このような二元論的構造から中国の事情を捉えることは、未だに日本人の知識人の心の底で続いているのではなかろうか。

（本論は、2016年９月８日の関西大学東西研究所研究例会「近現代中日間の文学交流と文化交渉」において発表したものに基づき加筆したものである。謹んでこの機会を与えていただいた陶徳民先生、井上克人先生、かつご丁寧に斧正をしていただいた松浦章先生に衷心より御礼申し上げる。なお関西大学大学院に留学中の厦門大学大学院比較文化学博士の凌夢月女史に協力いただいた。謝意を表する次第である）

42）西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム――大正日本の中国幻想』、東京：中央公論新社、2003年、16頁。